



Title	自己評価と接近回避志向：制御焦点の活性化による 相関関係の変化
Author(s)	尾崎, 由佳; 唐沢, かおり
Citation	対人社会心理学研究. 2012, 12, p. 59-65
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8093
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

自己評価と接近回避志向¹⁾

—制御焦点の活性化による相関関係の変化—

尾崎由佳(東海大学チャレンジセンター)

唐沢かおり(東京大学大学院人文社会系研究科)

自己評価の肯定性・否定性と利得接近志向・損失回避志向の相関関係が、制御焦点の活性化操作によっていかに変化するかについて、以下の2つの仮説を検証した。促進焦点を活性化させたときには、予防焦点を活性化させたときよりも、利得接近志向と自己評価の肯定性の正相関が強く示されるだろう(仮説1)。予防焦点を活性化させたときには、促進焦点を活性化させたときよりも、損失回避志向と自己評価の否定性の正相関が強く示されるだろう(仮説2)。実験参加者はまず制御焦点の活性化操作を受け、続いて肯定的あるいは否定的な特性語について自己評価し、最後に利得接近志向と損失回避志向の強さを評定した。結果は仮説1について不支持、仮説2について支持するものであった。考察として、促進焦点と予防焦点の各システムにおいて自己評価が果たすフィードバック機能について議論した。

キーワード: 自己制御、自己評価、制御焦点、接近回避志向、目標

問題

人間は自分自身を肯定的に評価することもあれば、否定的に評価することもある。このような自己評価の仕方の違いは、その人の目標志向性とのような関係性にあるのだろうか。本研究は、制御焦点理論に基づいて、人が利益を得ることを目指すか(利得接近志向)、それとも損失を避けることを目指すか(損失回避志向)という2種類の目標志向性と自己評価との関係性を明らかにするとともに、その関係性を調整する要因を検討することを目的とする。以下では、まず制御焦点理論について簡潔に紹介し、利得接近志向・損失回避志向の概念について説明した後、本研究の予測を導く。

Higgins (1997, 1998)は、人間が快に接近し不快を回避する際に異なる二種類のモードが存在すると指摘し、その主張を制御焦点理論(regulatory focus theory)としてまとめた。この二種類のモードは、促進焦点(promotion focus)と予防焦点(prevention focus)と呼ばれる。これらは、それぞれが独立した心理システムによって司られているという。

促進焦点のシステムは、目標を理想(ideal)として認識し、希望や期待を叶えるためにできるかぎり高い成果を達成することを目指す。また、利得に焦点化した自己制御傾向を示し、利得の存在に接近し、利得の不在を回避するように行動をコントロールする。言い換えれば、肯定的結果の有無に敏感に反応する。すなわち、肯定的結果を得ること(たとえば“褒められる”こと)を快として追求するとともに、肯定的結果を得られないこと(たとえば“褒められない”こと)を不快として避けようとする。このような志向性を、本研究では“利得接近志向”と呼ぶ。促進焦点のシステムは、成功フィードバックを受けると喜びの感情を

生じ、さらなる利得の獲得を目指して利得接近志向を強める。失敗フィードバックの場合は落胆の感情を生じ、この先利得が獲得できる可能性を低く見積もるので、利得接近志向は弱められる。

一方、予防焦点のシステムは、目標を義務(ought)として認識し、自らが負う責任として果たさなければならない最低限のことを確実にクリアしようとする。また、損失に焦点化した自己制御傾向を示し、損失の不在に接近し、損失の存在を回避するように行動をコントロールする。言い換えれば、否定的結果の有無に敏感に反応する。すなわち、否定的結果が起きないこと(たとえば“叱られない”こと)を追求し、否定的結果が起きること(たとえば“叱られる”こと)を避けようとする。このような志向性を、本研究では“損失回避志向”と呼ぶ。予防焦点のシステムは、失敗フィードバックを受けると不安の感情を生じ、これ以上の損失を防ごうとして損失回避志向を強める。成功フィードバックの場合は安心の感情を生じ、今後の損失可能性を低く見積もらせるので、損失回避志向が弱められる。

では、自分を肯定的に評価したり、否定的に評価したりといった自己評価のありかたは、利得接近志向や損失回避志向とどのような関係性にあるのだろうか。その予測を立てるにあたって、本研究では自己評価が果たすフィードバック機能に注目した。自己制御過程において、フィードバック機能とは“今目標をどのくらいまで達成できているのか”など自己の現状に関する認知が、後続する目標達成行動のコントロールに影響を与えることを指す(Carver & Scheier, 1982)。自己に対する肯定的あるいは否定的な評価は、自らの目標達成度についての認知を反映しており、それがフィードバックとなって自己制御に影響すると考えられる(Higgins, 1997; Leary &

Baumeister, 2000; Leary, Terdal, Tambor, & Downs, 1995)。たとえばソシオメーター理論(sociometer theory; Leary & Baumeister, 2000; Leary, et al., 1995)では、他者からの受容の程度を常にモニターしているソシオメーター(sociometer)というメカニズムが想定されている。ソシオメーターは、関係性評価すなわち“私の周囲の他者は、私と社会的関係をもつことをどのくらい重要だと考えているか”を監視するシステムであり、その監視結果を自尊心として出力する。もし自分が他者から受容されていることを感知した場合には自尊心が高められるが、充分に受容されていないことを感知した場合には自尊心が低下する。低い自尊心は警報の役割を果たし、他者からの排斥を防いだり、受容を回復したりするように強く動機づけさせ、対処行動を促す。つまり、自尊心という自己評価の一形態が、他者から受容されるという目標に対する現在の達成度の認知を反映し、その後の行動傾向に影響を与えるというフィードバック機能を果たしている。

促進焦点や予防焦点のシステムにおいて、自己評価はどのようにフィードバック機能を果たすだろうか。促進焦点のシステムにとって、もし“私には長所がたくさんある”というように肯定性を高く評価した場合、現在の自分は目標状態に向けて順調に近づきつつあることを意味し、将来的に高い成果や利益を獲得できる期待が高まる。したがって、利得接近志向をより強く示すようになるだろう。一方、“自分には優れたところが何もない”などと肯定性を低く評価した場合には、それは目標状態から遠ざかっていることを意味し、成果や利益の達成可能性を低く見積もらせるため、それらに接近する志向性を弱めるだろう。つまり、促進焦点のシステムは自己評価の肯定性が高いほど利得接近志向を強め、逆に低いほど利得接近志向を弱めるだろうという予測が導かれる。予防焦点のシステムにとって、もし“自分は欠点ばかりだ”などと否定性を高く評価した場合には、現在の自分が回避すべき悪状況に近いことを意味し、将来的な失敗や損害のリスクが高く見積もられるため、不安の感情が喚起されて損失回避志向を強く示すようになるだろう。一方、“自分にはあまり欠点がない”などと否定性を低く評価した場合には、今のところ悪状況とはかけ離れていることを意味し、失敗や損害の危険性が低く見積もられるため、それらを回避しようとする志向性を弱めるだろう。つまり、予防焦点のシステムは、自己評価の否定性が高いほど損失回避志向を強め、逆に否定性が低いほど損失回避志向を弱めるだろうという予測が導かれる。

留意すべきは、促進焦点と予防焦点のシステムが、それぞれ自己評価の異なる次元に特に反応しやすいと考えられる点である。人間は肯定的な評価プロセスと否定的な評価プロセスを備えており、さまざまな評価判断や

反応生成において各プロセスに対応した二次元性がみられる(Cacioppo & Berntson, 1994)が、自己評価においても“自分には優れたところや長所がどのくらいあるか”といった肯定性次元と“自分には劣ったところや短所がどのくらいあるか”といった否定性次元という2種類の次元が存在する(尾崎・唐沢, 2011)。促進焦点は、肯定的結果の有無に敏感であるため、自己評価においても肯定性次元に関して特に反応しやすいと考えられる。逆に、否定的結果の有無については鋭敏ではなく、否定性次元に関する自己評価に対しては反応しにくいだろう。したがって、促進焦点のシステムが司る利得接近志向は、自己評価の肯定性と強く関連するとともに、否定性とは関連みられないだろう。一方、予防焦点についてはその逆のパターンが予測される。予防焦点は否定的結果の有無について選択的に敏感であるため、自己評価の肯定性次元に反応しやすく、否定性次元には比較的反応しにくい。したがって、予防焦点のシステムが司る損失回避志向は、自己評価の否定性と強く関連するとともに、肯定性とは関連しないだろうと考えられる。尾崎・唐沢(2011)はこの予測について検討し、実際に上記のような関連パターンが示されることを確かめている。つまり、利得接近志向は自己評価の肯定性と正相関し否定性とは無相関であること、そして損失回避志向は自己評価の否定性次元と正相関し肯定性とは無相関であるという結果が、3つの調査研究を通じて示された。

本研究は、尾崎・唐沢(2011)の研究を発展させ、利得接近志向・損失回避志向と自己評価の肯定性・否定性の間にみられる相関関係を、促進焦点および予防焦点のシステムの働きに依拠しているのかどうかを確認することを試みる。そのために、本研究では各制御焦点を活性化させる手続きを用いる。促進焦点や予防焦点の各システムは、常に機能しているわけではなく、状況に応じて活性化されたり抑制されたりする。促進焦点のシステムが活性化しているときには、自己評価の肯定性によるフィードバックに反応して、利得接近志向を調節すると考えられる。しかし、活性化が低い場合はシステム自体が機能しない、あるいは機能が低下しているため、自己評価の肯定性に応じた利得接近志向の調節は生じにくいと考えられる。したがって、利得接近志向と自己評価の肯定性の正相関は、促進焦点を活性化させたときの方が、予防焦点を活性化させたときよりも強く示されるだろうと考えられる(仮説1)。同様に、予防焦点のシステムが活性化しているときには、自己評価の否定性によるフィードバックに反応して、損失回避志向を調節すると考えられる。しかし、活性化が低い場合には自己評価の否定性に応じた損失回避志向の調節は生じにくいだろう。したがって、両者間の正相関は、予防焦点を活性化させたときの方が、促進焦点を活

性化させたときと比べてより強く示されるだろうと本研究では予測した(仮説 2)。

制御焦点の活性化の操作方法としては、代表的な手法の 1 つである制御目標のプライミングを用いる。この手法では、参加者自身が理想として叶えたいと思っていること、あるいは義務として果たすべきだと思っていることについて自由記述させるという手続きをとる。前者の場合は理想目標をプライミングして促進焦点を活性化させ、後者の場合は義務目標をプライミングして予防焦点を活性化させる。このように制御目標をプライミングするという手法は先行研究において多数の使用例があり、制御焦点の活性化操作として有効な手段であることが確かめられている(Freitas, Liberman, & Higgins, 2002; Higgins, Bond, Klein, & Strauman, 1986; Higgins, Idson, Freitas, Spiegel, & Molden, 2003; Higgins, Roney, Crowe, & Hymes, 1994; Liberman, Idson, Camacho, & Higgins, 1999; Molden & Higgins, 2004; Wang & Lee, 2006)。自己評価の肯定性と否定性については自己報告法による尺度測定を行う。具体的には、肯定的な性格特性語リストと否定的な性格特性語リストを用意し、それぞれについて自己評価をさせる。この手続きを用いれば自己評価の肯定性・否定性をそれぞれ独立次元として測定できるため(尾崎・唐沢, 2011)、本研究の目的にも適していると判断した。利得接近志向と損失回避志向の測定法は PPFS 邦訳版(尾崎・唐沢, 2011)を用いる。これは制御焦点に関する目標志向性の強さを測定する尺度である Promotion/prevention focus scale (Lockwood, Jordan, & Kunda, 2002)を日本語訳したものであり、肯定的な結果や成功などといった利得について頻繁に考えたり獲得したいと強く思ったりする傾向を測定する利得接近志向尺度と、否定的な結果や失敗などといった損失について頻繁に考えたり防ぎたいと強く思ったりする傾向を測定する損失回避志向尺度の 2 つの下位尺度から構成される。

方法

実験参加者

大学生 114 名(男 67 名, 女 45 名, 不明 2 名, 平均年齢 = 22.42, $SD = 2.82$)が実験に参加した。2 種類の質問紙をランダムに配布することにより、促進焦点条件に 58 名、予防焦点条件に 56 名がわりあてられた。

手続き

大学の授業中に質問紙実験が実施された。まず、自己指針のプライミングによる制御焦点の活性化手続きとして、参加者は以下のような設問に対して自由記述式で回答した。促進焦点条件の設問は「あなたの人生において、あ

なた自身がこうありたいと思う“理想”はどのようなものでしょうか？ 中学高校のころ・現在・大学卒業後の 3 つの時期に分けて、あなたの思う“自分の理想”をおしえてください。」であり、予防焦点条件の設問は「あなたの人生において、あなた自身がこうあらねばならないと思う“義務”はどのようなものでしょうか？ 中学高校のころ・現在・大学卒業後の 3 つの時期に分けて、あなたの思う“自分の義務”をおしえてください。」であった。この設問に対する回答時間は 6 分間であった。続いて、肯定的な特性語 20 個と否定的な特性語 20 個がランダムに並べられたリスト²⁾に対して、現在の自分が各特性にどのくらいあてはまると思うかを“1. 全くあてはまらない”から“7. 非常にあてはまる”までの 7 件法で自己評価した。最後に、利得接近志向および損失回避志向の測定として PPFS 邦訳版 16 項目に 7 件法で回答した。

結果

PPFS 邦訳版の利得接近志向 8 項目の合計得点($M = 37.71$, $SD = 7.60$)と、損失回避志向 8 項目の合計得点($M = 32.37$, $SD = 8.27$)を算出した。信頼性係数はそれぞれ $\alpha = .84$, $.82$ であり、両尺度間の相関は $r = .13$ (ns) であった。自己評価の肯定性の得点として肯定的な性格特性 20 項目の合計得点を算出した($M = 90.22$, $SD = 13.56$, $\alpha = .86$)。また、自己評価の否定性の得点として否定的な性格特性 20 項目の合計得点を算出した($M = 70.85$, $SD = 15.75$, $\alpha = .88$)。自己評価の肯定性次元と否定性次元の間には中程度の負相関($r = -.49$, $p < .01$)がみられたため、以下の分析では、一方の次元の効果を検定する際に他方の次元を統制変数として投入することにより、各次元が独自にもたらす効果を検証した。

まず、利得接近志向を従属変数として、自己評価の肯定性および制御焦点と両要因の交互作用効果項を独立変数とした重回帰分析を行った。このとき、自己評価の肯定性についてはセンタリングし、制御焦点の要因については促進焦点条件 = 1、予防焦点条件 = -1 とエフェクトコーディングした。また、自己評価の否定性を統制変数として同時に投入した($\beta = -.05$, ns)。制御焦点の主効果および交互作用効果は有意ではなく($\beta_s = -.05$, $.12$, ns)、自己評価の肯定性($\beta = .31$, $p < .01$)の主効果が有意であった。交互作用効果は有意でなかったものの、条件間の偏回帰係数を比較することが分析の目的であったため、制御焦点の条件ごとに自己評価の肯定性の simple slope の検定を行った。結果、促進焦点条件において自己評価が肯定的であるほど利得接近志向が強いという有意な関連がみられたが($\beta = .46$, $p < .01$)、予防焦点条件では有意ではなかった($\beta = .17$, ns)。これらの simple

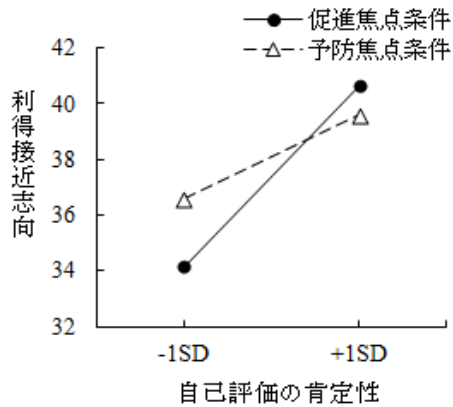


Figure 1 自己評価の肯定性と利得接近志向の関係

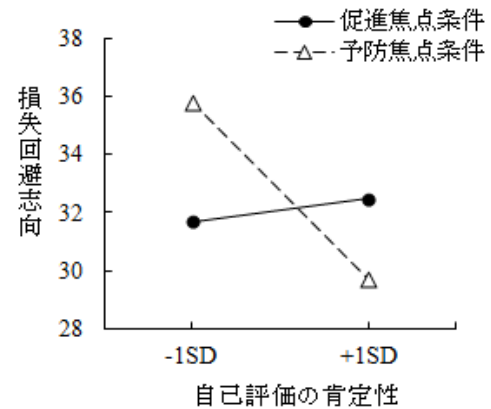


Figure 3 自己評価の肯定性と損失回避志向の関係

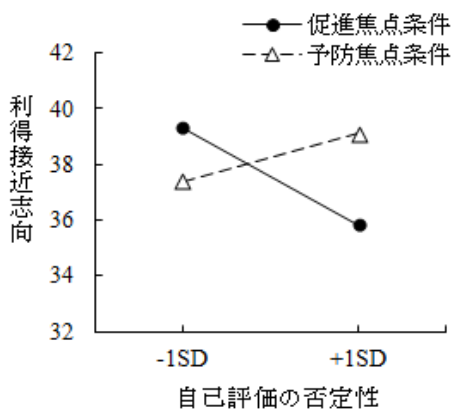


Figure 2 自己評価の否定性と利得接近志向の関係

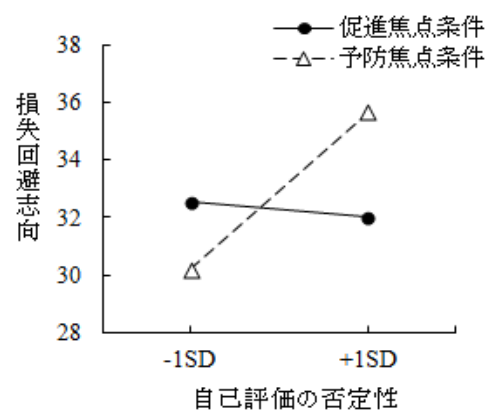


Figure 4 自己評価の否定性と損失回避志向の関係

slopeを表したのが Figure 1 である。

続いて、同じく利得接近志向を従属変数として、自己評価の否定性(センタリング済み)および制御焦点(促進焦点条件 = 1、予防焦点条件 = -1)と両要因の交互作用効果項を独立変数とした重回帰分析を行った。このとき、自己評価の肯定性を統制変数として同時に投入した($\beta = .30, p < .01$)。自己評価の否定性と制御焦点の各主効果は有意ではなく($\beta s = -.05, -.06, ns$)、交互作用効果も有意ではなかった($\beta = .17, ns$)。制御焦点の条件ごとに自己評価の否定性の simple slope を算出したところ、いずれの条件においても有意な効果はみられなかった($\beta s = .17, -.23, ns$)。これらの simple slope を表したのが Figure 2 である。

次に、損失回避志向を従属変数として、自己評価の肯定性(センタリング済み)および制御焦点(促進焦点条件 = 1、予防焦点条件 = -1)と両要因の交互作用効果を独立変数とした重回帰分析を行った。このとき自己評価の否定性を統制変数として同時に投入した($\beta = .16, ns$)。自己評価の肯定性と制御焦点の各主効果は有意ではなく($\beta = -.16, -.04, ns$)、交互作用効果が有意であった($\beta = .21, p < .05$)。そこで交互作用について詳細に検討す

るために、制御焦点の条件ごとに自己評価の肯定性の simple slope の検定を行ったところ、促進焦点条件では有意な効果がみられなかったが($\beta = .05, ns$)、予防焦点条件では自己評価の肯定性が低いほど損失回避志向が強まった($\beta = -.37, p < .05$)。これらの simple slope を表したのが Figure 3 である。

最後に、同じく損失回避志向を従属変数として、自己評価の否定性(センタリング済み)および制御焦点(促進焦点条件 = 1、予防焦点条件 = -1)と両要因の交互作用効果を独立変数とした重回帰分析を行った。このとき自己評価の肯定性を統制変数として同時に投入した($\beta = -.14, ns$)。自己評価の否定性と制御焦点の各主効果は有意ではなく($\beta = -.04, .15, ns$)、交互作用効果が有意傾向であった($\beta = .18, p = .05$)。そこで交互作用について詳細に検討するために、制御焦点の条件ごとに自己評価の否定性の simple slope の検定を行ったところ、促進焦点条件では有意な効果がみられなかったが($\beta = -.03, ns$)、予防焦点条件では自己評価が否定的であるほど損失回避志向が強かった($\beta = .33, p < .05$)。これらの simple slope を表したのが Figure 4 である。

考察

まず、利得接近志向についての結果をまとめる。促進焦点を活性化させたときの方が、予防焦点を活性化させたときと比べて、利得接近志向と自己評価の肯定性の間により強い正相関がみられるだろうという仮説 1 については、交互作用が有意ではなかったため、不支持であった。利得接近志向と自己評価の肯定性のあいだには、制御焦点の活性化操作にかかわらず安定した正相関の関係性がみられたということになる。1 つの可能性として、促進焦点のシステムが自己評価の肯定性のフィードバックを受けて利得接近志向を増進させるというプロセスを日常的に繰り返し経験してきたために、両者のあいだに自動的連合が生じていたためではないかと考えられる。つまり“私には長所がたくさんある”と認識すると“利得に接近する”という目標表象が自動的に活性化するという強い連合が形成されたのかもしれない。もう 1 つ、制御焦点の操作が無効であったという可能性も考える。後述するように損失回避志向については操作の効果が確認されたことから、本研究の操作がまったく無効であったとは考えづらいが、より強力な操作を用いれば異なる結果になった可能性も残されている。その可能性を支持する結果として、**simple slope** の検定では仮説と一貫する結果が示されていることが注目される。しかし、このようなあいまいな結果については慎重に議論すべきである。今後、制御焦点の活性化操作を見直すなどの改善を加えた上で、研究を重ねることが必要であろう。

利得接近志向と自己評価の否定性次元は、制御焦点の操作に関わらず、無関連であった。つまり、促進焦点の活性化時にも、予防焦点の活性化時にも、尾崎・唐沢(2011)の結果が再現されたことになる。この結果は、利得接近志向は促進焦点のシステムによって司られており、このシステムは自己評価の否定性には反応しないという本研究の主張と合致するものである。

続いて、損失回避志向についての結果をまとめる。予防焦点を活性化させたときの方が、促進焦点を活性化させたときと比べて、損失回避志向と自己評価の否定性の間により強い正相関がみられるだろうという仮説 2 は支持された。予防焦点の活性化時にのみ両者の正相関が観察され、促進焦点の活性化時には相関が消失したのである。つまり、尾崎・唐沢(2011)の示した結果は、予防焦点の活性化時のみ再現された。予防焦点のシステムは自己評価の否定性のフィードバックを受けて、損失回避志向の強弱をコントロールしたと解釈できる。“自分は欠点ばかりだ”というように否定性の高い自己評価をした場合、自分が今後失敗したり損害を被ったりするかもしれないという恐れから、損失回避志向を強く示すようになったと考えられる。

予期しなかった結果として、予防焦点の活性化時には自己評価の肯定性が低いほど損失回避志向が強いという関連がみられた。両者の関係性について一貫して無関連であったことを報告している尾崎・唐沢(2011)とは異なる結果である。なぜこのようなパターンが生じたのだろうか。この問いに対して、本研究の結果のみから決定的な答えを導き出すことはできないが、1 つの可能性を以下に挙げておく。本研究の主張のとおり、予防焦点のシステムは自己評価の否定性次元のフィードバックを受けて損失回避志向をコントロールしているとしよう。ただし、促進焦点が活性化しているときにはヒューリスティックに素早く判断を下そうとする傾向がみられるのに対して、予防焦点が活性化しているときにはシステマティックに情報を精査して慎重に判断を下そうとする傾向がある(Pham & Avnet, 2004)。そのため、予防焦点のシステムが損失回避志向のコントロールをするときには、できるかぎり網羅的に情報を参照して慎重に判断しようとするために、自己評価の否定性次元ばかりではなく肯定性次元についても参照情報として吟味するのではないかと考えられる。言い換えれば、予防焦点が活性化されたために情報探索が広域化し、自己評価の否定性次元だけではなく、肯定性次元もフィードバック情報の探索範囲の一部として取り入れられたと解釈できる。

本研究の意義は、自己評価と目標達成行動の関係についてモデル化するにあたり、目標内容および達成手段の質的な違いを考慮してそれぞれの関係性を予測し、それを実証した点にある。すなわち、促進焦点時には肯定的に自己評価するほど利得接近志向が強まり、予防焦点時には否定的に自己評価するほど損失回避志向が強まるといったように、目標状況や目標志向性の質的差異を考慮し、どのような状況において自己評価がどのように関与するかを個別に予測できるようになったのである。自己評価と目標達成行動の関係性は単純なものではなく、目標志向性の質的差異に応じた複雑な関係性が成り立っていることを示している(Payne, Youngcourt, & Beaubien, 2007)。

さらに、制御焦点を実験的に操作することによって、自己評価と達成行動の関係性が状況即応的に変化しうることを実証したことも注目に値する。人間が状況に応じて異なる自己制御システムを使い分け、それぞれの場合で異なる情報を参照しつつ、目標達成行動を柔軟にコントロールしていることが推察される。これらを指摘した点において、本研究は一連の自己制御研究に対して有意義な貢献ができたと言える。

制御焦点理論に関する研究文脈に関しても、本研究から新たな示唆が得られた。制御焦点理論は、課題遂行に関して成功あるいは失敗のフィードバックが与えられた

とき、制御焦点の違いに応じて異なる動機づけ効果をもたらされると主張している。すなわち、促進焦点時には肯定的なフィードバック(成功)によって接近行動に対する動機づけが高められるが、予防焦点時には否定的なフィードバック(失敗)によって回避行動に対する動機づけが高められるという。この予測は複数の研究結果(Forster, Grant, Idson, & Higgins, 2001; Shah, 2003; Van-Dijk & Kluger, 2004)によって支持されている。本研究においてもこれらの知見と一貫する結果が得られており、制御焦点理論の主張に沿った成果が得られたと言える。ただし、本研究と先行研究との間には相違点もある。上述の先行研究に共通しているのは、成功や失敗のフィードバックが他者によって外的に与えられたものであった点である。これに対して本研究では、自己評価という内的過程によって生成された評価がフィードバック効果をもたらすことが明らかにされた。つまり、外的フィードバックと同様に、自己生成された内的フィードバックにも接近や回避に対する動機づけ効果があることが示されたのである。さらに興味深い点は、特定の遂行課題に関する成否のフィードバックではなく、性格特性という抽象的なレベルにおける自己評価が目標志向性の強さに影響をもたらしたという点である。この知見は、人間という種固有の高度な自己制御システムの一部を表していると考えられる。Sedikides & Skowronski (1997)は、人間と他の動物を分ける重要な特徴は、自己に関する抽象化された表象である象徴的自己(symbolic self)を形成する能力であると論じている。この象徴的自己が自己制御プロセスにおいて中心的な役割を果たすことが人間固有の特徴であること、そして象徴的自己の働きによってこそ人間らしい高度な目標達成が可能だという。したがって、本研究は象徴的自己が自己制御過程に与える影響を実証したという点で、人間の高度な目標達成システムの解明に向けて1つの手がかりとなる知見を提供できたと言える。

また、本研究のもう1つの意義として、自己評価の肯定性次元と否定性次元それぞれがもたらす独自の効果を検証したことが挙げられる。従来の自尊心研究や自己評価研究では、肯定的否定的を両極においた一次元構造として自己評価を概念化することがほとんどであった。たとえば“自分は肯定的な属性をたくさん備えている”という肯定性の高い自己評価と“自分は否定的な属性をほとんど備えていない”という否定性の低い自己評価は、いずれも“高自尊心”とみなされて両者は概念的に弁別されなかった(e.g., Rosenberg, 1965)。しかし、本研究の結果は各次元の自己評価が異なる心理的影響をもたらしていることを示しており、したがって両者は概念的に区別されるべきであることを示唆している。具体的には、促進焦点時にフィードバック効果をもたらすのは肯定性次元の

自己評価のみであり、否定性次元の自己評価は影響しないという結果である。このような現象は、自己評価を一次元的概念とする旧来の考え方では十分に説明しきれず、肯定性と否定性の各次元を弁別することによって初めて解釈可能となる。このような自己評価の二次元的性の考え方の有用性を示したことは、本研究の成果の1つであると言える。このような二次元的な概念化の試みが今後の自己評価研究において普及すれば、従来は見過ごされていた現象が新たに発見され、さらなる研究発展に貢献する可能性もある。

ただし、本研究には今後の課題も残されている。本研究では制御焦点の活性化と自己評価という2要因が規定因となって制御的志向性に影響を及ぼすことを想定していた。しかし、規定因の1つである制御焦点の活性化のみを実験的に操作し、もう1つの規定因である自己評価については尺度測定を行い、制御的志向性との相関関係を分析するという手続きをとった。そのため、本研究の結果だけでは、自己評価と制御的志向性の両変数間の因果関係を特定できない。したがって、今後の研究課題として、制御焦点のみならず自己評価についても実験操作を加えたときにどのような影響が観察されるかを検討することが必要である。このような研究努力を重ねることによって、自己認知と自己制御の両過程がどのように連携しているかが明らかにされ、人間が適応的に目標達成行動をコントロールする仕組みを解明するための手がかりが得られるだろうと期待される。

引用文献

- Cacioppo, J. T., & Berntson, G. G. (1994). Relationship between attitudes and evaluative space: A critical-review, with emphasis on the separability of positive and negative substrates. *Psychological Bulletin*, **115**, 401-423.
- Carver, C. S., & Scheier, M. F. (1982). Control theory: A useful conceptual framework for personality-social, clinical, and health psychology. *Psychological Bulletin*, **92**, 111-135.
- Forster, J., Grant, H., Idson, L. C., & Higgins, E. T. (2001). Success/failure feedback, expectancies, and approach/avoidance motivation: How regulatory focus moderates classic relations. *Journal of Experimental Social Psychology*, **37**, 253-260.
- Freitas, A. L., Liberman, N., & Higgins, E. T. (2002). Regulatory fit and resisting temptation during goal pursuit. *Journal of Experimental Social Psychology*, **38**, 291-298.
- Higgins, E. T. (1997). Beyond pleasure and pain. *American Psychologist*, **52**, 1280-1300.
- Higgins, E. T. (1998). Promotion and prevention: Regulatory focus as a motivational principle. *Advances in Experimental Social Psychology*, **30**, 1-46.
- Higgins, E. T., Bond, R. N., Klein, R., & Strauman, T. (1986). Self-discrepancies and emotional vulnera-

- bility: How magnitude, accessibility, and type of discrepancy influence affect. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 5-15.
- Higgins, E. T., Idson, L. C., Freitas, A. L., Spiegel, S., & Molden, D. C. (2003). Transfer of value from fit. *Journal of Personality and Social Psychology*, **84**, 1140-1153.
- Higgins, E. T., Roney, C. J. R., Crowe, E., & Hymes, C. (1994). Ideal versus ought predilections for approach and avoidance: Distinct self-regulatory systems. *Journal of Personality and Social Psychology*, **66**, 276-286.
- Leary, M. R., & Baumeister, R. F. (2000). The nature and function of self-esteem: Sociometer theory. *Advances in Experimental Social Psychology*, **32**, 1-62.
- Leary, M. R., Terdal, S. K., Tambor, E. S., & Downs, D. L. (1995). Self-esteem as an interpersonal monitor: The sociometer hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 518-530.
- Liberman, N., Idson, L. C., Camacho, C. J., & Higgins, E. T. (1999). Promotion and prevention choices between stability and change. *Journal of Personality and Social Psychology*, **77**, 1135-1145.
- Lockwood, P., Jordan, C. H., & Kunda, Z. (2002). Motivation by positive or negative role models: Regulatory focus determines who will best inspire us. *Journal of Personality and Social Psychology*, **83**, 854-864.
- Molden, D. C., & Higgins, E. T. (2004). Categorization under uncertainty: Resolving vagueness and ambiguity with eager versus vigilant strategies. *Social Cognition*, **22**, 248-277.
- 尾崎由佳・唐沢かおり (2011). 自己に対する評価と接近回避志向の関係性—制御焦点理論に基づく検討— 心理学研究, **82**, 450-458.
- Payne, S. C., Youngcourt, S. S., & Beaubien, J. M. (2007). A meta-analytic examination of the goal orientation nomological net. *Journal of Applied Psychology*, **92**, 128-150.
- Pham, M. T., & Avnet, T. (2004). Ideals and oughts and the reliance on affect versus substance in persuasion. *Journal of Consumer Research*, **30**, 503-518.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the Adolescent Self-Image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Sedikides, C., & Skowronski, J. J. (1997). The symbolic self in evolutionary context. *Personality and Social Psychology Review*, **1**, 80-102.
- Shah, J. (2003). The motivational looking glass: How significant others implicitly affect goal appraisals. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 424-439.
- Van-Dijk, D., & Kluger, A. N. (2004). Feedback sign effect on motivation: Is it moderated by regulatory focus? *Applied Psychology-an International Review*, **53**, 113-135.
- Wang, J., & Lee, A. Y. (2006). The role of regulatory focus in preference construction. *Journal of Marketing Research*, **43**, 28-38.

註

- 1) 本研究は、松下国際財団研究助成(05-037)および科学研究費(若手研究(B) 21730499)の助成を受けた研究の一部である。
- 2) 他研究(尾崎・唐沢, 2011)のために行った予備調査において選出された特性語リストを用いた。この予備調査では、肯定的特性語群として肯定性評定の平均値が高かった語(5点中4点以上)、否定的特性語群として否定性評定の平均値が高かった語(同上)が選ばれた。また、評定の分布に極端な偏りがないことを確認し、肯定的特性語と否定的特性語の各平均文字数がほぼ均等になるようにした。

The relationship between approach-avoidance tendencies and valences of self-evaluation under the manipulation of regulatory focus

Yuka OZAKI (Student Project Center, Tokai University)

Kaori KARASAWA (Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo)

The present study investigated how the relationship between self-evaluation and goal orientations changes in reaction to activation of regulatory focus. The authors' hypotheses were as below; Hypothesis 1) when promotion focus is activated, people become more motivated toward approaching toward gains as they self-evaluate more positively, and Hypothesis 2) when prevention focus is activated, people become more motivated toward avoiding losses as they self-evaluate more negatively. Participants first received manipulation of regulatory focus, then evaluated themselves on positive and negative traits, and finally reported their goal strength toward approaching gains and avoiding losses. The results supported Hypothesis 2, but not Hypothesis 1. The feedback effects of self-evaluation in regulatory focus systems are discussed.

Keywords: self-regulation, self-evaluation, regulatory focus, approach/avoidance tendency, goal.